

せみ塚

有名な俳人、松尾芭蕉（1644～1694年）は、1689年、江戸（現在の東京）から日本の北東北・北陸地方まで、156日間の旅をしました。芭蕉は、弟子の河合曾良（1649～1710年）とともに、ほとんどの道のりを歩いて旅しました。2人は、芭蕉がとても尊敬していた詩人、西行（1118年～1190年）の足跡をたどり、西行などが詠んだ数々の場所を訪れました。2人の旅は、詩と散文を織り交ぜた旅行記であるおくのほそ道の題材となりました。

芭蕉と曾良は滞在していた近隣の町、尾花沢の住民に勧められ、太陰暦7月13日に山寺を訪れました。芭蕉は盛りに包まれた山中の境内で、その静けさと美しさに感銘を受け、蟬の俳句を詠みました。

閑さや Such stillness—（なんという閑さか）
岩にしみ入る The cries of the cicadas（蟬の声）
蟬の声 Sinks into the rocks（岩にしみ入っていく）

（ドナルド・キーン訳）

せみ塚の石碑は、山寺の上層部へと続く道沿いに立っています。長年の間に、数多くの詩人が敬意を表して訪れており、有名な地元の詩人であり、随筆家でもある斎藤茂吉（1882年～1953年）もその1人です。